

へんでした。

人々は栄養失調で苦しみながらも、なんとか日本へ帰りたいたい一心で、新京の寒く長い冬にも耐えられたのだと思います。

零下三十度あまりにもなる中、良く生きていたものだと思います。もう日本人等というプライド等は無くなり、食うことに困った親がなんとか子どもだけは助けたいと、泣く泣く現地人へ里子に出している人達もいました。

もっと悲惨なことを見ても感じなくなってきた頃、やっと日本に帰れるという噂が流れ始め、ほんとうに待ち遠しい日々でした。内地の人達の困ったのと違い、海の向こうの大陸では考えもつかない恐ろしいことの連続でした。

七月二十三日、やっとのことで、待ちに待った引揚げとなり、屋根のない列車で、雨のなか四日ばかりでコロ島へ。そうしてアメリカの上陸用船で博多港に。七百五十人乗り。一坪の所へ大人四人、蒸し風呂のような中を四日ぐらいいして博多港に着きました。

着港して一週間足止め、大陸から命からがら帰ってきた引揚げ者所持金は千円しか認められず、内地にいた人にはわかることのできないみじめな生活でした。

大陸で築きあげた財産、命にはなんの保障もなく裸のまま放り出され、やっと帰れた人も生活の借金に振りまわされて、苦しい開拓生活で亡くなった人も数多いでしょう。

生き残った人が少なくなった今、あのとときの苦しさ、辛さを語ってもわかってもらえなくなった今、戦争の影でおびえて逃げて何も残っていない、引揚げ者に対する理解を期待しております。

在滿十五年の足跡

埼玉県 齊藤 勝好

昭和六年六月一日、満州独立守備歩兵第一大隊に入隊し、満州事変ぼっ発以来各地に転戦し、八年十一月除隊して、大連昌光硝子に就職、十三年阜新へ転職した。

二十年八月十五日当時私は阜新炭鉱警備隊高德分隊の分隊長をしていたが、正午意外なニュースに驚くやらがっかりするやらで、茫然としてしまった。眠れぬままに夜をすごし、翌日出勤すると、一別命あるまで毎日平常どおり出勤するように」とのことで、今までどおり出勤はしたが、何をするでもなく、種々の憶測話で日をすごしていた。突如八月二十七日にソ連兵が侵入してきて、武装を解除され、武器弾薬を引き渡した。それから二日目頃から、武器を持っていない日本人を見た満人の暴徒が各所に蜂起し、日本人家を襲い、衣類や食糧また家の財道具、その他いっさい強奪し、乳のみ子を抱え、五歳の長女と三歳の長男を連れて近くの独身寮へ避難したが、うわさ話で、男は炭鉱で死ぬまで酷使され、女はソ連兵の自由にされるのだから、そのような敵の手にかかりはさしめを受けるのなら、子どもを殺し、たがいに刺し違えて死ぬんだと刃物をいつも用意して持っていた。私は警備隊長をしていたので、青酸加里を手に入れてほしいといわれて、医療班に交渉に行ったが、皆にわたるほどないし、一方にやって一方にやらないというわ

けにもいかないから、もう少し待ってもらいたい、と断わられたために、今考えると何十何百人の命が助かったのではないかと思う。

青酸加里を手に入れた人は、「家族といっしょに死ぬんだ」といって防空壕の中には行って行ったが、止めようもなく、ただ手を合わせて見送るだけだった。それから二日目の夜、収容所へ向かって襲撃するという情報、それを聞き、早まり急いで、収容所の風呂場で死んでいたのが五十八人、翌朝発見。襲撃はデマだった。ソ連軍へ申し入れをして、ようやく正常に生活ができるようになったが、ソ連軍の使役に行つての日に貰ってくる残飯で家族の命をつなぐ程度のものであった。その後炭鉱で採炭作業に行つて貰った日当で、どうやら一日二度の食事をとることができたが、これでは満足な栄養をとることはできず、月日が立つにつれて、栄養失調で死にずるものが続出、老人や乳幼児などは抵抗力が弱く、まっ先に死んで行った（私の二女十三子もその一人だった）。暮れもさしせまった二十七日朝、八路軍より「使役を五人出せ」と言ってきたが、希望する者もないが、出な

ければどんな日にあうかわからないので、一日だけと言うので、私以下四人、列の前後に兵隊が警戒について出発。ところがもう一日もう一日、品物をやると言われ、それにつられた。四日目に昼食、休憩のため部落に停車したそのとき、皆と相談して逃げ出した。後から銃声が聞こえたが、なんの障害もなく、途中二、三回持っていた品物をうばわれたが、命からがら逃げ帰った。かくして冬を越した五月二十五日の朝、私は食糧買い出しに出た。突然日本に帰るのだから用意するようにと伝達があり、十二時出発、と言う。何も知らない私は収容所の近くにもどってくると、大勢、人が集まって、日本へ帰れるのだ、と言う。そのままその列に加わり、駅に行き、検査を受け、無蓋車に乗りこみそのまま一夜を明かし、翌朝コロ島に向け出発、三日がかりで着いた。六月四日、博多に上陸し、手続きをすませ、帰郷列車で帰った。

小さな目で―チチハルから

東京都 馬場 永子

当時、早生れの小学二年生。

八日だったと思うのです。飛行機が城外にバラバラと爆弾を落として去るのを防空壕から眺めていた。チチハルで。

父が帰宅し「協和会の建物の隣にも爆弾が落ちて一人死んだ」と。翌日行って見たら、一軒の敷地がスリバチ状に穴となっていたのに驚いた。

十一日朝、道一つへだてた軍の官舎の人が一人もいなくなっていて、「日ごろ軍民一致で戦おうといっているが、先に出て行くとはなんたること」と、大人たちがあきれていました。それで民間人も女、子どもは南下させようと十四、十五日と駅に集合し、停まっている汽車に乗せられていたら、父が迎えにきて「日本は負けたから、死ぬ時は一緒のほうがいい」と、みんなで住まいに